



窺い知れ
ない世界

川崎ゆきお

あるものを変えたり、動かしたりすると、別のところで、妙なことが起こることがある。因果関係は全くない。例えば木を切るとか、石を動かすことと、その人の生活とはあまり関係はない。全くないわけではないが、庭の木がなくなったので、風通しがよくなったとか、日当たりがよくなったなどの影響はあるだろうが、それが原因で起こったことではなく、まったく別の理由の場合、直接の因果関係はないことになる。

また、いつも使っている道具を別のものに変えてから、妙なことが続いたりする。

これはそういう時期に当たっていたとも言える。

「まあ、それは思い過ごしでしょう。普段から色々と変化がありますよ。ただ、それと結びつけないので、意識的にならない。だから、因果関係など考えない。それ以上深くね」

「目に見えない何かの結界のようなものを壊したので、悪い魔のようなものが入り込んだのじゃないですか」

「君はいつの時代の人かね」

「いえいえ」

「そういうことは、心理学的な問題で、気にするから目立つのですよ。同じことが起こっていても、神秘事として結びつけない」

「それは分かっているのですがね」

「じゃ、問題はないでしょ」

「案外いいことがあっても気付かなかったするかも」

「そうでしょ。あるものを変えたり、動かしたりしてからいいことが起こる。この場合、気にならない。所謂ラッキーアイテムですね」

「それよりも、悪いことが続く方が心配です」

「じゃ、何も変えられないじゃないですか。茶碗が割れたので、別の茶碗に変えることもできないでしょ」

「ああ、そういうのは気になりません。割れたのだから。しかし割れてもいないのに、茶碗を変えると、気になります」

「何故変えるの」

「ああ、お茶漬けのとき、一寸小さいからです」

「じゃ、最近お茶漬けを食べる機会が増えたんじゃないですか。それはお茶漬けを好む理由が原因にある」

「いえいえ、増えていません。ずっと、この茶碗はお茶漬けには合わないなあと思いながら、食べていただけです。お茶漬けを食べたい精神状態にある、ということじゃないです」

「あ、そう。まあ、そういうことは心理的なことが原因で、不注意になったり、怠慢になった

りし、思わぬことを招くのかもしれません。その人の心情が色々なものを引き寄せたり、引き離したりするのですよ」

「まあ、そうですが、やはり目に見えない何かが働いているような気がするのですが、これもただの心の問題ですか」

「そうです」

「しかし、そうだと分かっている、もう一つ不思議さを感じるのはどうしてでしょうか」

「気のせいでしょう」

「何かをダイレクトに感じているんじゃないですか」

「動物的勘ですか」

「直感とまでは言いませんが、何か不都合な感じがしたりとか」

「心はそういう動きをするものですよ」

「それが分かった上で、言っているのですが」

「そこから先は私にも答えられません。窺い知れない世界だからです」

「やはり、あるんだ」

「そう喜ばないで」

「あ、はい」

了